



災害への対策商品のご提案

(株)文化シャッターは、「気候変動の緩和と適応に貢献する」ため、「エコ」と「防災」をキーワードとしたものづくりと事業を進めております。

環境負荷への軽減を図り、温室効果ガスを抑制する“緩和”に繋がる「エコ事業」や、自然災害に対する防災減災の役割を担い、温暖化による悪影響に備える“適応”に当てはまる「防災事業」。この「エコ&防災事業」に注力することで、地球および社会環境に貢献するソリューションをご提案してまいります。

そこで、今回は防災事業の主力商材である「ウインドブロックシリーズ」をご紹介します。近年の温暖化に伴う気候変動の影響により、風の発生に伴う竜巻や突風の対策として、“風災害”への備えが急務となっておりますが、耐風圧強度が高く、飛来物や強風から開口部を守る「窓シャッター」や「ガレージシャッター」をご用意しております。これは、人的・物的被害の危険性を低減させると同時に、建物被害の軽減につながりますので、防災減災アイテムとして、「高耐風モデル」もご検討ください。

そして、急な風雨災害が発生した場合でも、外出先からスマートフォンで電動タイプの窓シャッターを開閉操作できる「マドマスター・スマートタイプ」があり、電動窓シャッターは、専用クラウドサーバーとワイヤレス集中制御システムとの連携により、外出先からスマホ操作で開閉操作ができるだけでなく、大雨警報や暴風警報などの気象警報と連動して、全開状態の電動窓シャッターが自動で閉鎖する安心機能も備えております。

少しでもご興味を持たれましたら、お気軽にお問い合わせください。皆様からのお問い合わせを心よりお待ちしております。

少しでもご興味を持たれましたら、お気軽にお問い合わせください。皆様からのお問い合わせを心よりお待ちしております。



●工場・倉庫向け風対策商品のラインナップ



●戸建て住宅向け風対策商品のラインナップ

50th Anniversary

建築確認検査、住宅性能評価、
住宅かし保険、構造計算適合性判定、
省エネ適合性判定などの業務を行っています。

一般財団法人 **愛知県建築住宅センター**

CONTENTS

法人協力会通信 69

文化シャッター株式会社 岐阜営業所 ————— 表紙裏
棚瀬 守一

地域会だより ————— 1

連載【隔月 全6回】そして中間領域へ
第2回 -「曖昧な空間に向かう」- ————— 2
田井 幹夫地域会長就任にあたって ————— 4
石橋 剛・野々川 光昭・山田 浩史・出口 基樹地域会総会2024レポート ————— 6
大橋 康孝・間瀬 高歩・山本 寛康・山田 尚紀三重発: 記念講演会
川喜田半泥子の千歳山荘とその時代 ————— 7
～講師: 菅原 洋一 氏～
滝井 利彰愛知発: 活動報告
住宅研究会～研修旅行「広島・尾道」 ————— 8
眞木 啓彰「建築家+」vol.4 小さな名建築(住まい)の視察 — 9
森 哲哉・川口 亜稀子自作自演 262
食材のこだわり ————— 10
眞木 啓彰山のすすめ2 ————— 10
小塚 昭幸保存情報 第270回
データ発掘: 窯神神社 ————— 11
三輪 邦夫編集後記 ————— 11
東福 大輔・相原 宏康愛知発: 活動報告
第16回 JIA愛知美術サロン展 開催 ————— 12
小田 義彦・小島 篤・澤 恵子・田中 英彦・福田 一豊
花岡 正康・山田 正博・吉川 法人

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部
・7/5 第2回東海支部役員会■JIA静岡地域会
・予定なし■JIA愛知地域会
・7/12 賛助会企業PR会
・7/12 第2回役員会
・7/14 愛知県児童総合センター「一寸格子ワークショップ」■JIA岐阜地域会
・7/16 第3回役員会■JIA三重地域会
・7/19 第2回例会、会員研修会(見学)
・7/19 暑気払い

JIA に入会して

正会員

藤原 睦己 (JIA愛知)
浦野設計

昨春に入会し、あっという間に1年が経過しました。毎月のJIA東海支部機関誌を通して、建築に携わる多くの方々の執筆を拝読させていただくことで、豊富な情報を得ることができたと感じています。私の日々の業務においても多大に参考なっています。また、今後の活動に繋げていくことができると考えています。最後に、今後とも宜しくお願ひ致します。

正会員

青山 博行 (JIA愛知)
青山都市設計

建築の活動に際して、多方面で活躍される皆様と交流する機会を得ることができました。横のつながりの広さを感じ、学ぶ機会を得られ、さまざまな気付きを感じています。とても刺激的な事であり、視野が広がり、仲間と共有することで自分たちの役割だったり使命を見直すきっかけにもなり今後の参加を楽しみにしています。

表紙

JIA東海住宅建築賞10年～住宅はすべてに通ず 第3回 【都市にひらいていく家】

2棟を限界まで離して置き、その間に森にし、森を抜けるスロープを各階に3本掛け渡した。前面道路から最奥の地盤面まで1mの高低差があり、全層が自然にスロープになった。人は中庭の樹木を避けてカーブしたスロープを歩く。木々が主役なので、長さ12mスロープには柱は無く厚さは175mmと薄い。中央で190mmたわんでいるが、計算によりたわんでフラットになるように設計することで無柱かつ薄い構造を実現した。

栗原 健太郎 (JIA愛知)
studio velocity
一級建築士事務所

「曖昧な空間に向かう」

大学で教えることになり、果たして何が建築家としての自身の根幹にあるのか、やはり実務として関わってきたプロジェクトを振り返ることになる。「中間領域」に至る背景には、独立してからのプロジェクトだけではなく、修行時代の内藤廣建築設計事務所での経験、そして学生時代の日本やオランダでの建築的経験が大きく影響していることにも気づく。

修行時代のこと

2年間のベルラーへのプログラムのうち半分の1年間だけ済ませて、2ヶ月弱のヨーロッパ建築旅行の後帰国した。5年間の内藤廣建築設計事務所での経験は実に密度が濃く、息つく間もなかったと言っても良い。入所した頃の内藤事務所は、「海の博物館」(写真①)で学会賞を受賞したのち、徐々に公共建築の受注が入り始めて、スタッフの数も一桁から二桁になり活気にあふれていた。「十日町情報館」は基本設計中、「安曇野いわさきちひろ美術館」が追って始まり、「牧野富太郎記念館」もほぼ同時だった。住宅もいくつか進んでおり、最初の1年くらいはこれら全てに少しずつだが下働きとして関わることができた。台湾は台東の「卑南文化公園 遊客服務中心施設」は実施設計を担当させてもらい何度か現地へ赴いた。そして「茨城県天心記念五浦美術館」(写真②)では実施設計を終了させて、初めて現場常駐を経験させてもらった。竣工後はコンペや研究会など密実に内藤さんと関わらせて頂き、その後「倫理研究所富士高原研修所」を基本設計から実施設

計まで担当して5年間の修行期間を終えることになる。

独立への躊躇

実を言うと、30歳で内藤事務所から独立して事務所を持つ前に、再びアムステルダムに戻ろうと考えていた。ベルラーへでは日本の大学教育の概念とは全く違い、年齢的な世代感覚はなく、学びたい人が学びに来ているという感じだった。同級生には30歳の、ポーランドでは国家級のコンペに勝ったプロジェクトを進めている建築家二人組がいたし、他の学生たちも皆大学を出てすぐというのはむしろ少なかった。ヘルマン・ヘルツベルハーも建築家は生涯学び続けるべきだとのことで、プロフェッション教育の場としてベルラーへを創設した。バブル崩壊前夜に日本で建築を学んだ私は、建築が商業的に表層の差異を競い合い、仕事に溢れ、若手の建築家でも比較的たやすく仕事を獲得している状況を目にしていた。5年間の実務経験をj得た後、すぐに独立開業して設計活動を始める前に、実務経験をj得た自分が、今一度建築にどのように対峙していくべきか、考え直す必要を感じていた。

とはいえ資金の当てもなく、オランダ政府給費奨学金を目指し再度ベルラーへに戻り、残り1年の課程を済ますことを考えた。奨学金が取れなければ意を決して独立するしかない。一つ一つの仕事に真剣に向き合いながら、自身がそれまでにj得てきた建築的思考を設計に落とし込んでいくしかない。結果は落選であった。



③ 処女作の「世田谷上町の家」RC+木の混構造(©新建築写真部)



④ 近年の「中目黒の家」ではRCと木それぞれの寸法体系を近づけた(©浅川敏)

やむなしの独立

でも、それから幸運なことに、個人住宅を中心に仕事には恵まれ15年近くで60軒程の住宅を設計する機会を得た。とにかく依頼された対象に、自身に無意識に詰め込まれた建築的思考を絞り出すように設計し続けていたように思う。50歳を目前にして大学で教鞭を取る機会を得た時、改めて自身が設計にj込めてきた思考を振り返り、体系化する価値を見出し始めている。

設計にj込められた指向

「素形」という言葉に集約される内藤廣さんの建築観に5年間浸ってきたあと、絞り出された建築に意識的に注ぎ込まれた特徴がいくつかある。

●「構造形式の空間化」が第一に挙げられる。木架構の頭しが見られるが、木だけに限るものではない。(写真③④)これまで度々述べてきているが、社会の仕組みや技術が複雑化した現代において、自身の存在する空間こそが信じていることのできる最後の砦だと考えている。しかし建築空間でさえ、ビニールやプラスチックなどの石油化学製品に覆われ、構造が何によるものなのかも理解することが難しい状況だ。



① 海の博物館(内藤廣建築設計事務所HPより)



② 1年半の現場常駐を経験した茨城県天心記念五浦美術館(内藤廣建築設計事務所HPより)

田井 幹夫 MIKIO Tai / 建築家。アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所取締役。静岡理科大学建築学科准教授。

1968年生まれ。1992年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業。1992-93年ペルラーヘ・インスティテュート留学。1994-99年内藤廣建築設計事務所勤務。1999年アーキテクトカフェ設立。2004年アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所設立。2017年～静岡理科大学准教授。



⑤ 敷地に既にあった自然石を計画に取り込んだ「秦野の家」(©浅川敏)



⑥ 商品である価値としての個性の喪失(セキスイハイム東海HPより)



⑦ ハンナアレントを参照しつつ「住宅-家族を批判した「脱住宅」

コンクリート造であればコンクリート造らしく、鉄骨造なら鉄骨造らしく、木造なら木造らしく空間に構造形式が表出するように作ることを意識してきている。

●次に「経年変化素材へのこだわり」がある。これは時間概念への空間の参加ということになる。(写真⑤)上記にもある、仕上げにおける石油化学製品の使用は、残念ながら竣工時点が最も美しい状態で、それから劣化が始まる。耐えられないくらい劣化したら、廃棄するか張り替えれば良いという考え方だ。これは化学技術の進歩による素材の多様化とも言えるが、同時に消費社会の結果でもある。自由経済社会において建築が商品化されることで、購入時に一番価値を持つことを良しとするのは道理である。住宅メーカーとしては、ローンが終了する頃に新たに住宅を購入してもらわないとやっていけない。購入直後から徐々に価値が減衰していくことは商品としては当たり前なのである。問題なのは建築が商品なのか、ということになる。(写真⑥)少なくとも個人の最小単位空間である住宅は可能な限り手垢がつき、時間の流れを吸収するような素材であるべきだ。経年変化しない素材は主に石油化学製品で、化学反応によって姿を変化させた結果が商品になったものである。その仕組みは理解するに難しく、さらに新しい素材ゆえに超長期的な末路が予想できない。マイクロプラスチックの問題などが象徴するように、商品化する時点で将来的な問題まで検証していない。そのようなも

のに囲まれた環境で人間が生きていくことに不自然さを感じる。

●最後に「許容量の大きな空間」が挙げられる。あまり「間取りを固定しない」ということもできるだろう。特に住宅は使い方の変化が多い器だ。そもそも家族という集合体が不確定で、さらに出産や成長などで生活形態も変化し続ける。「脱住宅」(山本理顕、仲俊治著)で述べられているように、OLDKのような固定化された形式は、高度経済成長の礎として国が住宅政策として後押しした、「一住宅-家族」を形骸化したものであり、労働力生産装置としての子作りのための器を暗喩するものでしかない。(写真⑦)もっと自由な生活像、自由な働き方、家族の可能性を広げるためには、固定化されない大きな空間が必要である。さらに、昨今の温暖化で温帯気候の日本が亜熱帯化してきているなか、内外の境界が曖昧になりつつある。そもそも、自然の風を肌で感じたり、太陽の光を直接浴びることの気持ち良さは、人間としての本能が欲するものだろう。そのような周囲の自然環境に対して開かれることも「許容量の大きさ」に含むものとする。

「曖昧さ」を内包する建築へ

このような意識のもとに設計されてきた住宅を今一度振り返ると、規定され得ない曖昧な空間が内包されていることに気づく。それらはさまざまな立ち現れ方をしている、何か整理された一つの回答を目指し



⑧ 匿名的な巨大な気積を持つ材木座の家(©浅川敏)

ているわけではない。(写真⑧)しかし、間雲に気の向くままに生み出されたわけでもない。建築が持ついくつかの要因の組み合わせが統合されて空間化されている。わかりやすい割り切ったものではない、ぼんやりとした、でもそこそが人間が一番居心地の良い場所を生み出そうとしているのだと思う。

簡単にいってしまうと「中間領域」という使い勝手の良い言葉一つで済ませてしまおう空間を、半ば無意識的に作り続けてきたのだと気づく。次回はいくつかの自身の設計した事例を取り上げて、それらが何に向かって投げられてきたのか、解明していくことにする。

アーキテクトカフェ・
田井幹夫建築設計事務所 取締役
静岡理科大学建築学科 准教授
建築家 田井 幹夫



地域会長就任にあたって

静岡地域会長 石橋 剛

静岡の建築文化をリードする



このたび、2期目となる静岡地域会長に就任しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2年前の1期目の就任時には、それまでコロナで停滞していた静岡地域会の活動をコロナ前に戻すということを目指しました。その目標はおおむね達成できたと考えております。しかしながら、コロナでできなくなっていた事業を再開しただけとも言え、静岡地域会の活動をより充実させ、さらには会員の増強につなげるということまでには至っていないというのが現時点での反省点となっております。また、地域会の日頃の活動を情報発信して広く認知度を高めるということも残された課題ととらえております。静岡地域会が、様々な活動を通して静岡の建築文化の向上に寄与できるような団体になれることを目指して、この2年間の活動方針を以下に述べたいと思います。

まずは、従来の活動をさらに充実させていきたいと思っております。ようやくコロナ前のペースに戻ったJIA塾、建築家講演会、建築ウォッチングについては、内容をさらに充実させて継続していきたいと思っております。

次に、静岡地域会の活動の情報発信として、ホームページ(閉鎖中)の再開、またSNSなどでの情報発信などを行っていききたいと思います。普段の活動を発信することで、地域会活動への参加者が増えることにつながればと思います。

3点目としては、建築家の職能を一般の方により知ってもらうための活動を行いたいと考えております。再開するホームページを通じて行うのか、展示会のようなイベントを開催するのか、ワークショップのような形態とするのか、効果的な方法を検討したいと思います。

これからの2年間の任期、静岡地域会が静岡の建築文化をリードできるような活動を少しでも多く行いたいと思っておりますので、会員の皆様、今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

愛知地域会長 野々川 光昭

地域ならびに建築家の将来を見据えた活動



このたび、愛知地域会長に就任させていただきました野々川光昭です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。昨年度の建築家大会2023in常滑においては、多くの会員の皆様の御協力ならびに御支援をいただき感謝申し上げます。東海支部および愛知地域会は、これまで歴代の先輩の方々が始め、継続し、築き上げた多くの創造的活動の財産があります。これらを大切にするとともに、社会環境や価値観の変化に柔軟に対応して取り組んでまいります。

本年度は、これまでの教育支援、環境活動、建築相談、行政支援などの公益活動の継続・発展とともに、ホームページをリニューアルして、地域の建築家の考え、活動、仕事をより多くの方々に知っていただき、地域とともに歩む建築家職能集団としての存在価値を高めていきます。ここで、皆さまに知っていただきたい財務状況の話を行います。コロナ禍においては、収入が減りましたが、事業自粛の影響によって支出も減ることで収支は成り立っていました。昨年度から徐々に通常の事業が行えるようになった一方で、収入は減ったままの状態です。地域会には、積立資金がありますが、数年で底をつくことも考えられます。本年度は、無駄を省き支出を抑え公益活動を行います。財務の健全化策についても検討していきます。2024年度は、以下の3点を基本方針として取り組んで参ります。

1.地域との繋がり強化

「地域に根差した公益事業」を基軸とし、これからも事業活動の継続・発展に取り組めます。そして、建築関係団体、行政、市民、学生などとの対話の窓口を広げ、地域と会員活動の情報発信を充実させます。

2.地域会の活性化と持続化

コロナ禍終息を迎えリアル参加による事業と、多種多様な交流と研鑽の場を設けます。また、近年の社会状況の変化と会員の減少のなか、持続可能な地域会運営のため委員会の再編成をおこない、財務の健全化についても長期視点で取り組みます。

3.地域と建築家の将来を見据え

公共建築の設計者選定のありかたを見据えたコンペ・プロポーザルの支援、そして、地域の災害対策については建築関連団体と連携して取り組みます。また、本部理事会が提案する建築家資格制度改革案を周知し、会員間の議論を深めていきます。

地域の将来、そして建築家の将来のための活動に御協力をお願いするとともに、会員の皆さまとリアルにお会いし活動できることを楽しみにしております。

岐阜地域会長 山田 浩史

地域に必要とされる 団体を目指して



この度、岐阜地域会会長を務めさせていただくこととなりました。2年間宜しくお願い致します。

岐阜地域会は東海支部4地域会の中では一番少ない会員数ではありますが、少数精鋭により活動を続けております。昨年までも前内田会長の元、有意義な事業を多く開催してまいりました。しかしながら組織として会を継続させるには、役職を担うそれぞれの人員が必用です。その役職を会員でまわしていく運営の観点から考えますと、この先に少し不安を感じております。今回2度目の地域会長を受けさせて頂いた立場からも、やはり共に活動する仲間を増やしていくことの必要性を強く感じております。組織運営の観点からは会員拡大、より有意義な事業を開催していく観点からは、他地域会や他団体との協働も有効ではないでしょうか。

共に活動する仲間を増やすには、JIAの存在や活動内容を今まで以上にアピールしてゆくことが必用です。継続事業となっています「JIAの窓」は、岐阜の地で活躍する非会員建築家にJIAの活動を知り、魅力を感じて頂くきっかけとなっておりますので、今年度も開催し、新たな出会いと交流の場にしていきたいと思っております。更には、同業者以外の一般の方にもより広くJIAを知って頂くことが組織の存在意義として必用です。その為には、地域を巻き込んだ活動が必要で有り、地域の人と考えるまちづくり事業や、子供たちに向けた教育事業が有効かと考えます。そこで今年度は「子どもと建築」建築教育を新たな活動のひとつに加えます。この分野は、現在の岐阜地域会では活動しておらず、しかしながらこれから先の世の中に向けて、建築の魅力を伝えるべき相手は子ども達ではないかと考えます。建築教育の活動を通じて、子供たちそして保護者の皆様にJIAの存在と活動を伝えていきたいと思っております。

地域を巻き込んだ事業を開催するには多くの人員が必要になる傾向が有り、その解決策として他地域会や他団体との協働の必要性も感じております。それは岐阜地域会だけでは出来ないスケールメリット生み、仲間を増やす良い機会になります。

岐阜地域会を盛り上げるべく今年度も活動してまいりますので、皆さまのご理解とご協力、さらには積極的なご参画を宜しくお願い致します。

三重地域会長 出口 基樹

コンセプトは 重なりながら繋がる



2度目の地域会長を務めさせていただくことになりました。どうぞ皆様よろしくお願ひいたします。1度目は2020-2021年度で、コロナ禍と被ってしまい、対面や外向きの事業が軒並み中止となり、自らの力不足もあり、何かを成し遂げた実感もなく、漫然と任期を終えた印象が残りました。正直なところ自分の中でも不完全燃焼な感もあり、三重地域会としては異例ですが、2度目の登板となります。前回の経験と反省を活かし、充実した2年間になるよう励みますので、お力添えよろしくお願ひいたします。

さて、三重地域会の2024年度のコンセプトは「重なりながら繋がる」です。人や組織またイベントや事業など、それぞれが持つ領域を重なり合わせながら繋げることで、大きなまとまり(かたち)をつくろう、そう考えています。建築家はそれぞれが得意な分野、独自のコミュニティ、活動エリアを持っています。会員同士はもとより、会員以外の方々とも連携することで、そのまとまりは更に大きくなって行くと思っております。そんな場を地域会の事業を通じて創り出すことができれば良いと考えています。そのためにも、まずは足元の例会の在り方を考えたいと思っています。

三重地域会では伝統的に、例会で会員全員が意見を交わし議論して、事業の方向性や内容を決定してきました。そのプロセスは維持しながら、会議以外の時間を多くとれるよう考えています。以前から例会内で研修会を開催していますが、それに見学会を加えようと思っております。建築家の基本はもちろん「建築」ですから、それを見て学ぶ機会は大変重要です。先日、ある団体の事務方の女性と雑談していた時「JIAの人は、私がイメージしていた建築士の姿そのものなんです。」と仰いました。我々の建築に関わる度合いや関わり方、姿勢を指した言葉だと推察します。色々なご意見はあるでしょうが、まさにそこが根本なんだと思います。「建築」に触れ、考え、関わることこそがJIAの本筋であり、「建築」には「社会」が内包されていますから、そこから社会に関わり、建築家として貢献することができるかと確信しています。例会の在り方については試行錯誤することになるかも知れませんが、皆様にご協力いただき前を進みたいと思っております。

地域会総会 2024 レポート

静岡地域総会 【開催日】 5月16日



2024年5月16日(木) 静岡市産学交流センターにおいて「2024年度通常総会」が開催されました。必要定足数9名(会員の1/5)に対し出席者数15名、委任状9名計24名(定足数を満たす)によるものとなりました。

議長専任の後、

- 1, 2023年度事業報告
- 2, 2023年度決算報告
- 3, 運営役員改選の件

以上について審議され承認されました。2期目となる石橋剛新地域会長はコロナによってストップしてしまった活動を更に充実させ静岡の建築文化をリードすると述べられました。

大橋 康孝 (JIA三重)

高橋茂弥建築設計事務所



愛知地域総会 【開催日】 5月24日



愛知地域会の2024年度通常総会はラグナスイート名古屋に於いて開催された。

森哲哉地域会長より第1号議案「2023年度事業報告」、第2号議案「2023年度収支決算(監査報告)」について報告し、承認された。生津康広選挙管理委員長より第3号議案「役員選任」について報告し、承認された。

野々川光昭新地域会長より「2024年度事業計画」の基本方針3点「地域との繋がりが強

化」「地域会の活性化と持続化」「地域と建築家の将来を見据え」が示された。その後「2024年度予算」が報告され、総会は滞りなく閉会した。

間瀬 高歩 (JIA愛知)

地域計画建築研究所



三重地域総会 【開催日】 4月25日



2024年4月25日、三重地域会の2024年度通常総会が開催された。会場は津市にある創業明治22年の老舗洋食店『東洋軒』。会員の過半以上が会場出席、さらに東海支部から関口啓介幹事長に来賓として御出席いただいた。総会では森本前地域会長をはじめ、旧執行部から2023年度の事業内容および収支決算が報告され承認された。その後、出口新地域会長へと進行

が引き継がれ、2024年度の役員構成、事業計画や予算等の詳細が報告され、会員各位が真剣な面持ちで聞き入っていた。

山本 覚康 (JIA三重)

山本一級建築士事務所



岐阜地域総会 【開催日】 4月25日



内田実成岐阜地域会長の挨拶で会は始まり、1号議案として内田会長より「2023年度事業報告」「2023年度収支決算報告」がされ、滞りなく可決承認されました。

引き続き、新年度会長の山田浩史氏より「2024年度岐阜地域会役員」「2024年度事業計画案」が発表されました。その中でも、岐阜地域会の継続事業「JIAの窓」における非会員や職人、学生との交流を発展させる

べく、建築教育をテーマに「子どもと建築」というキーワードを新たに加えた活動方針が示されました。その後「2024年度予算案」が報告され、総会は滞りなく終了しました。

山田 尚紀 (JIA岐阜)

デザインボックス



川喜田半泥子の千歳山荘とその時代

●日時:2024年4月25日(木) ●会場:東洋軒本店 ●講師:菅原 洋一 氏(三重大学名誉教授)

4月25日JIA三重2024年度総会が津市丸之内「東洋軒本店」開催されました。

総会終了後、菅原洋一三重大学名誉教授による記念講演会が行われました。演題は「川喜田半泥子の千歳山荘とその時代」で菅原先生の永年に亘る調査研究の報告と今後の津市のまちづくりにかける熱い思いが語られました。

川喜田半泥子、本名久太夫政令^{きゆうたゆう まさのり}(1878～1963、明治11～昭和38)は百五銀行の頭取を務めた実業家でしたが、一方で「東の魯山人、西の半泥子」と称された陶芸・書・俳句・絵画・茶道などに長けた文化人でもありました。川喜田家は元々木綿を扱う伊勢商人で江戸にも店を構えていましたが、本宅は津の分部町(現松菱百貨店の位置)にあり、当主はここで生活していました。百五銀行は元士族により設立された銀行でしたが、明治期の合併吸収などを経てその株を川喜田家が引き受けることになり銀行の経営に関わることになりました。半泥子は1919年(大正8)に第6代頭取となって1945年(昭和20)までその役を担いました。銀行本店からの帰途、川向うに見える千歳山に魅せられ1915年(大正4)ここに山荘を建て居を移します。10年後の1925年(大正14)には「千歳窯」を開き「半泥子」と号して、この地の陶土を使って陶芸作品を焼き様々な文化人と交流を深めます。

この山荘は1911年(明治44)に旧知の建築家大江新太郎氏^(※)の設計によるもので、「イングリッシュ・コテージ式」ともされる田園住宅風の邸宅で洋館と和館が一体となった建築でした。設計図面は同年に開催された「東京勸業展覧会」に出展され好評を博しました。完成した山荘は当初案より規模は縮小されたものの、多くの客人との親交の場ともなっていました。しかしその後、数奇な運命を辿ることになります。1943年(昭和18)鈴鹿の海軍工廠に寄贈・移築され、戦後1950年(昭和25)には同市内で再移築されて電電公社の施設に、さらに1984～1985年(昭和59～60)電電公社の民営化に伴い取壊しとなります。その報道に接した



講演をする菅原氏



講演会の風景



▲ 鈴鹿にて解体直前の千歳山荘
◀ 記念講演会チラシ

県外の民間団体が翌1986年(昭和61)に移築のため部材を搬出保管することになります。しかしその後再建されることなく部材の所在も不明のままでしたが、行方調査によって民間団体の倉庫に保管されていることが分かりました。そして津市教育委員会などが現地を検分をした結果大部分の部材は健全でそれらの部材による復元は十分可能であると判断されています。また鈴鹿での解体前には三重大学と名古屋大学共同による記録保存調査が行われており復元のための貴重な資料ともなっています。

千歳山は川喜田家から津市に寄贈され、そこには現在半泥子の作品などを公開展示する「石水博物館」や国登録有形文化財の収蔵庫「千歳文庫」などの施設があります。

そして「半泥子と千歳山の会(半泥子と千歳山の文化遺産を継承する会)」では半泥子の功績を顕彰し、千歳山を拠点とした津市の新しい町づくりを提案し活動を行っています。

- 提案1:千歳山に半泥子を偲ぶ千歳山荘を復元整備し津の顔、津の魅力をつくる
- 提案2:全国的知名度を持つ半泥子のイメージを津市のまちづくりに活用する
- 提案3:半泥子生誕150年(2028年)を目標とした千歳山の整備を行う
- 提案4:地域と行政の協働で、町づくりを行う新しい形を確立する

私たちはこの講演会での話を聞き、半泥子の千歳山荘が復元され、それを核とした公園整備が行われて新しい町づくりが実現されることに期待し、そのための活動に協力する思いを深めました。

※大江新太郎は日光東照宮の修復や明治神宮の造営にも関わり、「明治神宮宝物殿(重要文化財)」の設計も手掛けた人物。

参照資料:菅原洋一氏提供の講演録



滝井 利彰 (JIA三重)
一級建築士事務所タック設計室

住宅研究会～研修旅行「広島・尾道」

●開催日:2024年 4月 11～13日

4月11日から3日間、住宅研究会の研修旅行に出かけました。参加者は、会員6名、スタッフ1名の合計7名です。少人数ということもあり、予定変更や移動がスムーズにできたと思います。しかし、このような充実した研修旅行をもっと多くの人と共有したかったですね。

初日は、広島駅から厳島神社に直行し、宮島の小路を愉しみながら厳島神社を見学しました。屋根の修復工事に足を止め観察したり、床下の構造を見ている姿は、さすが建築家だなと思います。

その後、高速船に乗り広島市内の宿泊先「ホテルKIRO」に荷物を預け、市内を散策します。開店時間17時～19時の2時間、在店20分、一人2杯限定の「ビールスタンド重富」で今までに飲んだことのない至福の生ビールを体験し、地元料理のお店で夕食を美味しくいただきました。その後「おりづるタワー」R階のルーフトップバーで夕景を望み、広島

の穏やかな街を堪能しました。

2日目は、市内の「平和記念資料館」「平和公園」「世界平和記念聖堂」「猫屋町ビルヂング」を路面電車を使い散策し、広島出身の方に教えてもらった人気店で広島焼をいただいてから次の目的地「尾道」に移動です。

尾道の宿泊先は、谷尻誠さん設計の「ホテルCYCLE」です。夕食までの間は、「千光寺」や「尾道本通り商店街」を散策し、夕食に臨みます。この旅の一番の目的でもあるアトリエ・ムンバイ設計「LOG」です。「LOG」では衣食住において「循環すること」を心がけているそうです。予約時間の少し前に行き、館内を案内してもらいました。ギャラリーには施工途中に検討された色サンプルや様々な素材が展示されています。趣のある色のサンプルは、それだけで芸術品のようです。館内に使われている素材や色合いは、日本とは異なる雰囲気が出ています。

食事も素晴らしいです。地元で採れた野菜にこだわり、飲み物も地元で作られたお酒やソフトドリンクばかりです。満足感いっぱいの夜になりました。

最終日は、「ホテルCYCLE」で朝食をいただいてから、明るい時間の「LOG」、「尾道市立美術館」を見学します。

その後「ベラビスタ」に行き「エレテギア」で昼食、結婚式が終わるのを待って「リボンチャペル」を見学します。そして最終目的地「新勝寺 洗庭」です。洗庭で瞑想を体験しました。少し居眠りもあり、心地よい旅の最終地になりました。久しぶりの企画でしたが、建築家ならではの情報交換ができて、濃厚で充実した研修旅行になりました。

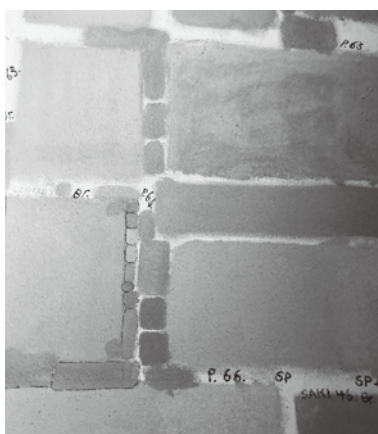
眞木 啓彰 (JIA愛知)
MA設計室



世界平和記念聖堂



おりづるタワー・ルーフトップバー



LOGギャラリー・サンプル



リボンチャペル



新勝寺 洗庭

「建築家+」vol.4 小さな名建築(住まい)の視察

●開催日:2024年3月20~21日

来年度発刊予定の、「建築家+」vol.4の検討委員会がスタートしました。次号は“住まい”をテーマにすることが決まっています。キックオフとして、小さな名建築(住まい)の視察を企画しました。呼び掛けに、住研から8名、会員2名、編集者2名、合わせて12名が参加しました。

初日は、立原道造の残したスケッチをもとにつくられた「ヒアシンスハウス」を訪れました。さいたま市の別所沼公園にあり、だれでも自由に見学できます。多くの市民やJIA埼玉地域会の協働により夢が継承され、運営が行われています。87年前に思い描かれた、僅か4.3坪の建築ですが、公私の

スペースが上手く分離され、南東の角に設けられた大きく、メカニカルな開口部により窮屈さはありません。むしろ絶妙なスケールで、居心地の良い空間でした。

その後、三鷹市にある「スミレアオイハウス」へ。建築家・増沢洵が、1952年に建てた自邸「最小限住宅」を原型に、小泉誠さんがリデザインし、1999年につくられたものです。現在は、定員4名の9坪の宿として運営されています。詳しくは、つづく宿泊体験レポートをご覧ください。

翌日は、埼玉県行田市にある、ものづくり大学の「カップマルタンの休暇小屋」を見学しました。現地実測をもとに、ドアノブや

蝶番に至るまで忠実に再現されています。普段は非公開となっており、見学できたのは幸運でした。約5坪の小さな小屋ですが、モデュールと黄金比で構成された濃密な空間でした。今回の視察では、時代に淘汰されないもの、建築家が追い求めた暮らし、小さくても豊かな空間を体感し、住まいの“根っこ”に触れることができたと思います。

森 哲哉 (JIA愛知)

森建築設計室



ヒアシンスハウス(撮影:伊藤幸子)



ヒアシンスハウス(撮影:伊藤幸子)



スミレアオイハウス 内部



スミレアオイハウス 外観夕景



カップマルタンの休暇小屋

「スミレアオイハウス」宿泊体験レポート

三鷹市の住宅街にひっそりと佇む「スミレアオイハウス」20年間4人家族の生活の場として育ったアオイさんから鍵を預かりいざ入室。9坪の「最小限住宅」はシンプルで、無駄のない質素な佇まいながらも、12名が寛いでも窮屈さを感じない空間の広がりを感じました。

1952年の増沢洵による「最小限住宅」は、作図の題材になったり実寸大の建て方のイベントに参加したりと幾度か触れる機会がありましたが、今回の視察で実際に体感する機会に恵まれました。

9坪の住宅は、規則性のあるグリッド割となっていて、水回りとキッチンが固定されていますが、吹抜けとなるリビングと和室、2階のL型のスペースが一部屋となる形で繋がっていて、アオイさんから伺った幼少期から成人するまでの4人家族の暮らしは、成長に合わせて家具や建具で可変できる作りとなっています。当時では斬新でモダンな狭小住宅ですが、日本古来の住まい方を継承されていて、工夫次第で如何様にも住める可能性があり、障子や木に囲まれた安らぎを感じ寛げる心地よい居場所でした。

夜は南の窓の障子越しからの明かりが、静かな住宅地に温かい灯火となっています。

今回「建築家+」vol.4、小さな名建築(住まい)の視察に参加することで、若い頃雑誌で刺激を受けた「最小限住宅」に泊まれる体験を得て、質素で美しい普遍的な日本の住まいの豊かさを見直す機会となりました。

川口 亜希子 (JIA愛知)

Liv設計工房



食材のこだわり

30年ほど前に「食品と環境問題」の講演を聞きました。ちょうど長男が産まれた時期ということもあり、食生活や習慣を見直すきっかけになりました。その時から気にかけているのは、残留農薬、食品添加物、電磁



波、建築建材などです。その後も気にしながら生活をしていましたが、3年前に蕁麻疹を発症し、病院からの処方どおりの薬を服用します。薬を飲むと症状は治りますが、薬が減りません。継続して飲まないと治らないと主治医から言われ、疑問を持ち始めました。

様々な書籍やSNSなどでいろいろなことを調べてみました。そもそも薬とはどんなものなのか?日本での農薬規制はどうなのか?食品添加物はどれくらい入っているものなのか?小麦粉(グルテン)からどんなダメージを受けるのか?正しいのかどうか疑問なこともあるので、有機米、有機野菜を中心の食事にし、薬と小麦粉をやめてみることにしました。

まずは3週間、やめます。首が痛くて毎日のように貼っていた湿布もやめました。なん

となく良い状況になっているように感じたので、次は3か月続けます。3か月経つと明らかに良くなっているのがわかります。2年が過ぎ、蕁麻疹が治ってきたのと合わせて、疲れが残らなくなり、鼻詰まりがなくなってきました。口にする物の大切さを痛感しています。

有機米や有機野菜は高いですが、病気になって通院し、薬漬けの生活になることを思えば安い物です。今は安全な食材探しが楽しみになっています。



眞木 啓彰 (JIA愛知)
MA設計室

山のすすめ2

10年位前、「スキーのすすめ」と題した自作自演で少し触れていますが、スキーオフシーズンの山修業にどっぷりと浸かってしまいました。最近、体調不良と健康維持(持病克服)に、専念している状況で、百名山から二百・三百名山をと…時々奮起している状態です。山好きの建築主の影響で、スキー場付近の山から始め、登頂と下山後の達成感やリフレッシュ感覚がやみつきとなりました。そして、山頂周辺には、祠や神社・奥宮と云った神様に会えることもしばしばあり、信仰の対象となっている山も数多く存在します。

ところで最近、神様の乗物といわれる神輿の調査に参加する機会を得、本業の仕事の方でも神様に接する事が多く有りました。門外漢の分野では有りますが、民族学・古

文書・飾り装飾専門の先生方に神輿の構造・歴史などいつもとは、ちょっと違う建築の勉強をさせてもらいながら、神様に接すること



が何回もありました。山登りが修行とか洗礼を受けにくいような気持ちになる感覚が人々を魅了し、感動を倍増させるのでしょうか…。山頂で会う人は、すぐに友人になり会話がはずみます。時々の失敗は、謙虚さを取り戻す反省の機会となっている今日この頃です。山に自然に感謝します…合掌。

※因みに写真は5年ほど前に山頂手前で出会った武将隊とのワンショット



小塚 昭幸 (JIA岐阜)
建築計画研究所

名鉄尾張瀬戸駅から北へ10分あまり、緩い上り坂を歩いていくと「釜神社」と掘られた石柱が見えてくる。左には「磁祖加藤民吉窯跡」。急な斜面に造られた石段をのぼっていくと緩やかな勾配の瓦屋根が見えてくる。鉄筋コンクリートの4本の柱だけで支えられたシンプルな拝殿、その奥に登り窯を模したユニークな、コンクリート製の本殿が鎮座している。本殿の奥、北側には木節(きぶし)、蛙目(がいろめ)と呼ばれる良質な粘土を掘る採掘場が広がっている。瀬戸の風景の1つである。

資料によれば、瀬戸は1300年の歴史があるやきものの町、長い歴史の中、江戸中期のピンチを救ったのが瀬戸に磁器の製法を伝えた加藤民吉。この社は中興の祖と言われる加藤民吉を祀って、文政7年(1824)に創建、昭和39年(1964)には消失した社を鉄筋コンクリートで再建されている。毎年の9月の第2土・日に開催される「せともの祭り」は加藤民吉を称える祭礼で、市民に親しまれている。



【概要】

所在地: 愛知県瀬戸市窯神町112
創建: 文政7年(1824)

三輪 邦夫 (JIA 愛知)
RE建築設計事務所

編集
後記

● 今月から、ARCHITECT 編集長を仰せつかった東福です。このたび、愛知地域会の広報委員会とブリテン委員会が一つになり、広報委員長に就任した私が編集長になりました。私が関わった企画は来月8月号から少しづつはじまってゆきますが、今まで2人の建築家に交互に執筆していただいていた連載ページ、その片方に、出版、模型、写真、保存などの「建築設計の周辺の仕事」に関わる方たちに執筆していただく予定としています。引き続き、興味をひかれるような紙面を作っていこうと考えておりますので、執筆へのご協力、どうぞよろしくお願いたします。(東福 大輔)

● 久しぶりの編集後記の執筆です。前回三重地域会より東海支部会報委員会へ出席させて頂いていたのが9年前。その後は東海支部との関わりも少なく地域会中心で事業に関わってきましたが、この度再度三重地域会の広報委員長をさせて頂く事になり東海支部ARCHITECTの編集にも参加していきます。

前回から年月も経ちARCHITECTの在り方も大きく変化していく中、私のできる事を考えていきたいと思います。さて今年度は、支部及び各地域会の役員等の交代年度であり、各総会が開催され新しく就任された各会長の方針で進んでいく年です。「地域会長就任にあたって」の挨拶にも各地域会会長の考えや思いが言葉として伝えられている。私としても新しく始まる事を楽しみに感じています。今後も各県(地

域)と地域会、地域会と地域会、地域会と東海支部を繋げていく一つがこのARCHITECTであればと思います。

(相原 宏康)

ARCHITECT

第430号

発行日 2024.7.1 (毎月1回発行)

発行責任者 浅井裕雄

編集責任者 東福大輔

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会広報委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/



第16回 JIA愛知美術サロン展 開催

4月16日(火)～21日(日)まで、第16回JIA愛知美術サロン展が、東桜会館で開催されました。入場者は約250名で昨年と同じでしたが、リピーターが多くあちこちで出展者との対話が見られました。JIA外の出展者が3名ありました。8名の作品とコメントをご紹介します。

JIA愛知美術サロン 代表幹事 田中英彦



雨後の江南

小田 義彦
伊藤建築設計事務所

蘇州市は上海市の西、長江(揚子江)の南(江南)に広がる長江デルタの中心都市として栄えた街。上海蟹の産地として名高い陽澄湖がある。「東洋のベネチア」とも呼ばれる旧市街では30年前と変わらず、今でも街中を巡る運河が主要な交通手段という。雨に煙る古民家が連なるこの地域は、世界文化遺産として登録されている。



上高地の夏

小島 篤(非会員)
都市デザイン研究所

悠久の時を刻む大正池にはカラマツの立ち枯れが1本佇んでいた。以前は多くの立ち枯れのある景観が魅力だったが、現在は限りなく透明な湖面に逆さ奥穂高岳が映えている。息をのむ、絶景である。今回のテーマは「刻まれた時間」。標高3190mの奥穂高岳と清流梓川と大正池は訪れるたびに異なる表情を見せてくれる。



ヌードデッサン

澤 恵子

二年前からお誘い頂き、デッサン会に参加しています。この作品はデッサン会で2023年に描いたものです。ふくよかのでゆったりとしたモデルさんの雰囲気を感じながら描きました。画材は色々用意するのですが、こちらは水彩やインクの華やかな色彩を使い、瑞々しく表現しました。



マルタ共和国(地中海)

田中 英彦
連空間都市設計

数年前に訪れたイタリアの南、地中海に浮かぶ小さな島国、紀元前からの歴史は長い、16世紀に欧州征伐に向かうオスマントルコに騎士団が果敢に立ち向かい、感銘を受けた欧州列強が潤沢な資金を供給、要塞都市を築造した。歴史的価値の高い建築と、入り江のヨットハーバーが織りなす景観で、地中海屈指のリゾート観光地でもある。絵の聖母教会は、16世紀に建てられ高さ64m、ランドマーク的建造物。



堀川

福田 一豊

本誌に掲載する作品は以前描いたF15号の作品に手を加えたものです。松重開門から南に500メートルほどいった東側の川岸から南側を見た風景で、名古屋高速の高架橋やレンガタイルの建物、左にボートだまりがあり、その間を流れる堀川の水面が西日に輝いていました。



夏休み

花岡 正康(非会員)
ブルーウム一級建築士事務所

夏休みになると毎日のように神宮プールに行き、近くのダンプ山(熱田公園内にある断夫山古墳)の探検をしました。その道すがら眺めた堀川と今の堀川の風景と時折思い出す伊勢湾台風のことも回顧しながら作画しました。



ボロブドゥール遺跡

山田 正博
建築計画工房

仏教三大遺跡のジャワ島ボロブドゥールを一月に訪ねた。800年頃に約50年をかけて建造されたが、完成後に王朝が崩壊し、密林の中で1814年に発見されるまで1000年に及び歴史から消え去っていたという大きな謎を秘めている。基壇の中央に大ストゥーパがそびえ、その下に釣り鐘形のストゥーパが数多く規則的に並んでいる中、円壇部分の半壊したストゥーパから露出している釈迦牟尼仏像を象徴として描いた。



臥龍山 行基寺

吉川 法人
吉川法人+都市建築デザイン室

仕事の打ち合わせが早く終わり、帰りの途中に、ふと立ち寄った寺院です。尾張徳川家と関係のある寺院で、書院から濃尾平野が一望でき、夕日の景と重なって大変感動し、思わずスケッチした寺院です。院内にある江戸時代の檜時計は、現在も時を刻んでいます。

JIA愛知美術サロン展 出展者募集

この作品展は、
年1回 JIA会員の建築家と共に、
絵画制作する仲間の作品を展示する、
絵画展です。
またヌードデッサン会は、
年数回プロのモデルを描きます。
参加者歓迎です。

(JIA会員外OK、問い合わせは田中まで)



雨後の江南
透明水彩 F8号
小田 義彦



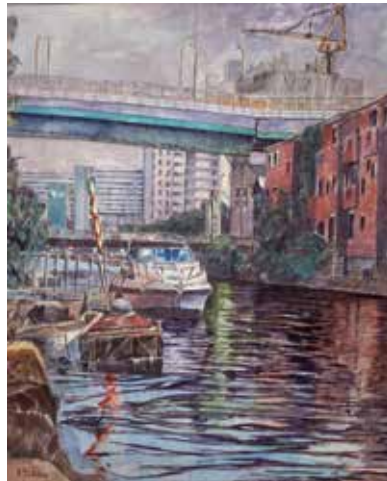
上高地の夏
透明水彩 F25号
小島 篤



ヌードデッサン
紙、水彩、コンテ、インク
澤 恵子



マルタ共和国(地中海)
油彩 F20号
田中 英彦



堀川
水彩 F15号
福田 一豊



夏休み
不透明水彩
花岡 正康



ボロブドゥール遺跡
山田 正博



臥龍山 行基寺
吉川 法人